保育士の意識から見る長時間保育に関する研究

A Study on Nursery Teachers' Views about the Long Childcare Hours

児童学研究科　児童学専攻　06-0633　伊瀬　玲奈

Ⅰ．本研究の目的

本研究の目的は①長時間保育や，長時間保育を受けている子どもに対する保育士の意識を明らかにする②保育士が子どもの疲労と捉えている様子や現象を明らかにし，先行研究における長時間保育を受ける「子どもの様子や事象」を検証することである。

Ⅱ．本研究の構成

本研究の構成は以下の通りである。

序章　本研究の構成

第Ⅰ章　本研究の課題及びその背景

第Ⅱ章　研究方法の概要

第Ⅲ章　結果と考察

第Ⅳ章　終章

Ⅲ．長時間保育の現状と先行研究の課題

１．長時間保育の現状

近年，保育所における保育時間の長時間化が進んでいる。特に低年齢児ほど在所時間が長時間化する傾向がある。開所時間が 1 日 11 時間を越える保育所は，2005(平成 17)年には全保育所の 62.1%にのぼり，2001(平成 13)年と比較すると約 1.4 倍となっている。

２．長時間保育及び疲労に関する研究

長時間保育に関する先行研究を検討した結果，長時間保育の定義が時代によって異なること，保育者に長時間保育を受ける子どもの姿を問うと，肯定的な意見よりもあまり肯定的でない子どもの姿を回答する傾向にあることや，保育士に長時間保育を受ける特定年齢の子どもの姿を問う研究は見当たらないということがわかった。

疲労に関する研究については，疲労の定義は幅広く，特に低年齢児を対象にした研究は多くないこと，保育士の意識にある「子どもの疲れ」を取り上げた研究は多くないことがわかった。先行研究の検討の結果から，本論文の意義を確認した。

Ⅳ．研究方法の概要

１．調査の組み立て

長時間保育の定義を「１日 11 時間以上の保育」と整えた上で，保育士に質問紙調査を行う。これを予備調査とし，その結果を基に質問紙を作成する。作成した質問紙を使用して，保育士が子どもの疲労と捉えている様子や現象を明らかにする。これを本調査とする。

近年，長時間保育は子どもに影響がないという研究結果が出ている。これを踏まえて「長時間保育は子どもに影響があるか・ないか」という趣旨の質問項目は設定しない。本論文では実際に子どもが生理学的疲労・肉体的疲労・精神的疲労などで，「疲労しているか」，「疲労していないか」を明らかにすることを目的にしない。

２．予備調査の概要

予備調査の目的は，11 時間を超えて行われる延長保育の実態と保育士の延長保育・延長保育利用児に対する意識を明らかにすること，延長保育を受けている子どもの様子を保育士に問い本調査の調査項目作成の資料とすることである。調査は，東京都内の公私立の協力を得られた保育所(公立 3 ヵ所，私立 1 ヵ所)で，2006 年 10 月～2006 年 12 月上旬に実施した。対象は，調査時に保育士として勤務している 100 名。回収は 72(72%)であった。無記名自己記入式質問紙調査を行ない，調査票は全保育所において，直接配布し回収を行なった。質問紙は，回答者の属性を問う項目と，勤務する保育所の開所時間，延長保育を利用する子どもの人数，延長保育を利用している子どもの様子を問う項目，延長保育に対する意見を問う項目で構成した。

回収データの統計処理は SPSS11.5 を用い，自由記述は類似の記述内容をまとめて傾向を分類した。調査協力の意思確認と個人情報の扱いについては，調査票に，個人情報の保護に関する配慮を記載し，回答の提出をもって協力への同意が得られたものとした。

３．本調査の概要

本調査の目的は，より多くの被験者(保育士)に対して質問紙調査を行い，保育士が疲労とみる子どもの様子と，その様子が表出する時間帯を明らかにすることである。様子を問う子どもは，１歳児クラスに在籍する幼児（13 か月～35 か月)とした。

調査の対象と方法は，東京都内公立保育所 49 ヵ所，私立保育所１ヵ所で，2007 年 6 月～8 月上旬に実施した。対象は調査時に保育士として勤務している 750 名。無記名自己記入式質問紙調査を行なった。調査票の配布と回収は，公立保育所については郵送にて行なった。私立保育所については直接出向いて行った。

質問紙は回答者の属性を問う項目と，勤務する保育所の開所時間，延長保育を利用する子ども及び担当保育士の人数，延長保育利用児の疲労と保育士が意識している様子とそれが表出する時間を問う項目，遊びの内容，保育室間の移動回数，食事内容，提供時間，長時間保育に対する意見を問う項目で構成した。回収データは予備調査と同様の手続きを行って分析した。

Ⅴ．結果と考察

１．予備調査の結果と考察

配布 100 に対し，回収は 72(72%)で，72 票とも分析対象とした。以下に長時間保育を受けている子どもに対する保育士の意識を示す主要な結果を記す。

延長保育を受けている 0･1 歳児の子どもの様子で感じている項目に印をつけてもらった。

結果は，58.1%の保育士が延長保育利用の 0・1 歳児の子どもの様子から，「疲れている」と感じていることが明らかになった。次に「ごろごろしている」(35.5%)，「日中と比較して甘える」(41.9%)，「指しゃぶりをする」17.7%，「ぐずることが多い」16.1%，「よくあくびをする」16.1%，「泣きが多い」12.9%，「こだわりが強い」8.1%　が続いている。

自由記述で記載された内容は，延長保育時間が長くなればなる程，利用回数が増えれば増える程子どもの疲れが増しているなど「疲れが見られる」という記述が最も多かった。

２．本調査の結果と考察

配布 750 に対し，回収は 459(61.2%)であり，その全てを分析対象とした。以下に長時間保育を受けている１歳児クラス在籍児（13 か月～35 か月。以下，対象児と記す）に対する保育士の意識を表す主要な結果を記す。

(１)保育士が対象児の疲れと感じる項目

子どものどのような様子から「疲れている」と感じるかについて，「非常に感じる・やや感じる・どちらともいえない・あまり感じない・まったく感じない」まで 5 件法で回答してもらった。「疲れている」と感じる子どもの様子として，「甘えることが多い」を「非常に感じる」と回答した保育士が一番多かった。

(２)保育士が対象児に疲れを感じている時間帯

1日のどの時間帯に子どもが「疲れている」と感じるかについて，「非常に感じる・やや感じる・どちらともいえない・あまり感じない・まったく感じない」まで5件法で回答してもらった。「登園した時」「午前の保育中」「昼食前・中」「午睡に入る時」「午睡から起きる時」「延長・夜間時間帯」に，「疲れている」と「やや感じる」という回答が最も

多かった。平均値をみると，非常に狭い値の中に全ての項目が入っており，特に目立つ時間帯はない，と捉えられる結果であった。

（3）保育士が対象児の疲れと感じている項目と他項目との関連の検討

保育士は，子どものどのような様子から「疲れている」と感じているかという回答を，保育者の属性や保育経験年数，早朝保育・延長保育の経験の有無などの項目で分けて順位を出した。

その結果，担任と担任以外の保育士に「疲れている」と感じる項目の順位に違いは見られず，その他保育士の属性や早朝保育の経験の有無，延長保育の経験の有無，保育経験年数，早朝保育・延長保育の子どもの人数などでも比較を行ったが，順位に変化は見られなかった。

（4）保育士が対象児に疲れを感じている時間帯と他項目との関連の検討

保育のどの時間に子どもが「疲れている」と感じているかという問いに対する回答を，保育者の属性や保育経験年数，早朝保育・延長保育の経験の有無などの項目に分けて順位を出した。早朝保育の経験の有無，担任か非担任かなどで，保育のどの時間に子どもが「疲れている」と感じているかという問いに対する回答順位に入れ替わりが見られたが，一定の方向性や定義を見出せるほどの違いではなかった。

総じていえば，「疲れている」と感じる時間帯については，保育士の属性やその他の保育経験に左右されにくいということがわかった。

（5）日頃感じる長時間保育利用の対象児の疲れの様子についての自由記述内容

得られた自由記述内容は，カテゴリー分析を行った。結果は「イライラ(9)」という回答が最も多かった。その他，「甘え(6)」「ごろごろ(5)」「ぐずる(5)」「週明けに疲れが見える(4)」と続いている。

Ⅵ．研究の成果

１．研究の成果

（1）保育士が「疲れ」とみる子どもの様子について

長時間保育は子どもに影響がないという研究結果がある。しかし，本研究では，保育士が長時間保育を受ける子どもの「疲れ」を，依然として懸念していることが明らかになった。調査の結果，93.0%の保育士が，長時間保育を受けている 1 歳児クラス在籍児（13 か月～35 か月）の様子から何らかの「疲れ」を感じたことがあると回答した。子どものどのような様子に「疲れ」を感じているかという問いでは，「甘えることが多い」「ぐずること

が多い」「ごろごろしている」が高順位を占めた。これらの保育士が子どもの「疲れ」を感じる項目は，保育士の属性やその他の保育経験に左右されにくく，順位に変動はほとんどみられなかった。保育士は，経験年数に関係なく子どもの姿から「長時間保育における疲れ」を感じているといえる一方で，保育士には「長時間保育を受けている子どもは疲れている」という無自覚の意識があり，その意識から，別の要因があるかもしれない子どもの姿や様子を「長時間保育による疲れ」と結び付けていると解釈することも可能である。

（2）長時間保育に対する保育士の意識

予備調査及び本調査では，保育士が保育内容や環境に配慮しながら保育を行なっていることが読み取れた。しかし，その一方で「家庭に近い環境にはしているが難しさがある」など苦慮していることや，家庭や保護者の働き方への思いも読み取ることが出来た。

保育士は長時間保育の必要性やニーズは感じているが，長時間保育を受けていることによる子どもの疲労や負担を案じているという傾向は，先行研究において見られたものであるが，その傾向は，本論文の意識調査の結果と概ね一致したといえる。

２．おわりに

本論文では，「保育士は長時間保育を受けている子どもに疲れを感じている」ということは検証された。しかし，「疲れの様子」と「疲れと考えられる様子が表出する時間帯」については，担任と非担任間の認識に顕著な違いは見られなかった。保育士がどの子どもについても理解していることの証とも考えられるが，質問紙調査票の作成手順・質問項目・結果の検討方法，または研究の視点に何らかの不足や誤りがあり，それを見落としてきた可能性も大きい。

「疲労」の症状は，疾病に近い慢性疲労症候群や，不定愁訴，精神的な疲労・肉体疲労まで様々である。乳幼児の場合には「疲労」を認識してそれを言葉で訴えることが少ない。「疲労」の原因は，その日の生活リズムや保育内容などの影響も受けると思われる。「疲れている」と保育士が感じていても，子どもが実際に「疲れているか」どうかは，生理学的な手法を用いなければ明確にすることは出来ないが，それは本研究の対象領域を超えた問題である。保育士はなぜ「疲れ」を感じているのか。低年齢の子どもの「疲労」と保育士が考える行動や様子には何らかの共通項があるのか。それを探っていくことが今後の課題である。

参考文献

(1)芦田宏　勝木洋子　下里里枝　中尾博美　藤尾久子　八木育子(2002)　保育所における長時間保育について，姫路工業大学環境人間学部研究報告第４号.

(2)安梅勅江（2002）長時間保育の子どもの発達への影響に関する追跡研究−２年後の子どもの発達に関連する要因に焦点をあてて−, 社会福祉学第 43 巻第 1 号.
(3)斎藤和雄（2000）子どもの疲労とストレス, 小児保健研究第 59 巻第 2 号.